

波の音がさざめく、
砂浜の見える浅い洞窟の中で、男たちは生活していた。

パン、パン、パン、パン、パン、パン、パン、パン
——ッ！！

「アアあっ、あっ、あっ、あ、！ あ♡おあ！ はげしっ♡！
んアア~~~~♡」

腰を一心不乱に振りたくる若者の下で、あどけなさの残る少年——カイトは艶めかしく身を振り、与えられる凶暴な衝動にただ啼いていた。

少年の白く、柔らかそうな股は大きく左右に割り開かれ、男の猛った欲棒が深く突き刺さり、激しく行き来を繰り返している。

突き刺さった質量は、カントボーイ特有の割れ目におびたらしい程の愛液を纏わせ、先走りと混ざり合って下卑た水音を立てる。

じゅっば、じゅぼッ♡ じゅぼッ♡ じゅぼッ♡ぐぼオッ——
！！！！

グジュンッ、グジュッ！グジュッ！グジュッ！

激しい律動に合わせ、カイトの白い足がゆらゆらと宙を揺れ、そのつま先は強烈な快感にビクッビクッと震えあがる。

若者はカイトの華奢な腰を掴み、体重を浴びせるようにして容赦のないピストンで責め立てていく。

男が重い吐息を漏らして肉体をぶつける度に、接合部からは逃げ場のない粘膜の擦れる音が響き、溢れ出た愛液と、いつかの誰のものかもわからない精液がぶびゅぶびゅと泡を立てて吹き出てくる。

「はあっ、はあっ、ふうっ！ はふうっ！ フンっ！！ フンっ！！」

グジュッ！ グジュッ！ グジュッ！ グジュッ！

パン、パン、パン、パン、パン——ッ！

「おお、かしぐ、あっ？！ あっ〜〜〜！ うっあ〜〜〜、ぐちゃぐちゃいやああ♡♡♡」

「朝からうっせーな。早起きすぎんだろ」

異様な熱気が籠もる洞窟内に、気怠げな中年の男——シゲの声が響く。

しかし、カイトを犯す若者は、その律動を止めることはない。

「朝活っすよ！ 折角順番来たんだからっ！！ 長く楽しみたいじゃん！ ねっ！ カイトくんっ！」

ぐちゅんっっっ！

「んひいっ♡」

「あはっ♡ 甘いイキまんこ、締まりすぎええ！」

ズコズコズコズコズコズコズコッ！

ぐぶうっっ！ ぐぶっっ！ ぐぶっ、ぐぶっ！ パン、パン、パン、パン——ッ！

「んァァ！ ぐっあぁ、！ ふかいイ♡やぁぁ！ おぐっ、ぐいぐりやぁぁぁ～～♡♡♡」

「こぉ～～～やってえ～、奥ぐ～～りぐり潰されるのっ、だあい好きだよねえっ？」

ぎゅうううううう、ぐぐぐぐ～～～と、体重をかけて最奥の 敏感な 拠点を 執拗に押し潰すと、面白いくらいにカイトの白い肢体はビクンと跳ね上がる。

「あ、また跳ねたあ。あ～～、痙攣イキまんこ、気持ちいい～～♡♡♡」

この場にいる漂流者は、男ばかりの6人

哀れな生贄であるカイトと、今まさにカイトを 貪っている若者。そして、それを眺める中年男のシゲ。

離れた場所では、サラリーマンの佐伯がその行為を おかずにして、自らの分身を 浅ましく慰めている。

もう残りの二人は一見、冷静に見えるが——。

インテリ風の男、一ノ瀬は、今にも若者を射殺しそうなほどに冷たい視線を向けている。

もう一人の厳格な雰囲気のリダー、元海上保安官の高瀬は、心底疲れ果てたように座り、理性と狂気の狭間で視線を逸らしていた。

「そうかい。じゃあ俺も出勤前の景気づけに一発ヤルか。おい、ケツ向けろ」

腰布を緩めながら近づいてきたシゲに、若者が顔をしかめる。

「はあ？ 冗談でしょ？！ それにあんた、まだ“順番”来てないだろうが」

「あ？ 誰のおかげで毎日飯食えてると思ってんだ？ ああ？」

「それ言うのは卑怯じゃん！ ねえ！ 高瀬さん？」

若者が助けを求めるように視線を向けたが、シゲは鼻で笑った。

「高瀬も分かってんだろ？ 俺が海で魚を獲ってこなきゃ、お前たちは全員ここで餓死するだけだぜ。なあ—— 誰が一番偉いか、カイトくんが一番よく分かってるんだからなあ？」

シゲは、若者の下で喘ぐカイトの髪を鷲掴みにし、無理やりその顔を仰向けにさせた。

「ひ、っ……あ、」

涙と涎でぐちゃぐちゃの顔で、カイトは必死に声を絞り出す。

これ以上、自分のせいで男たちの空気が陰悪にならないように。自分がはけ口になってさえいれば、この脆い共同体は壊れずに済むのだから。

「……あ、おれ、は……、へいき、です……っ」

その健気な、自己犠牲の言葉に、洞窟の奥で鋭い砂の音が響いた。

先ほどまで睨むだけに留めていた一ノ瀬が、拳を強く握りしめ、衝動的に立ち上がろうとしたのだ。

カイトが他の男に蹂躪されるたび、その従順さに狂おしいほどの苛立ちと独占欲が、一ノ瀬の内で膨れ上がっていく。

だが、その一ノ瀬の肩を、隣に座る高瀬が強い力で押えつけた。

「……よせ」

高瀬は顔を伏せ、視線を逸らしたまま、掠れた声で呟く。最初にカイトが生贄に捧げられた時、「怪我だけはさせるなよ」と大義名分を盾にして見捨てた男の、それが限界の理性だった。ここで現役漁師として食料という生命線の綱を握るシゲの機嫌を損ねれば、全員の命がそこで終わる。

「健気で涙が出ちゃうよなあ。なあ、高瀬サンよ」

シゲは男たちの緊迫した空気に気づいているのかいないのか、下卑た笑みを浮かべて高瀬を挑発した。

「……ほどほどにしとけよ」

「チッ……。仕方ねえなあ、よっと」

若者は不機嫌そうに舌を打ち、動きを止めた。しかし、前穴を抉る欲棒は挿し込んだまま、カイトの脇に手を差し入れてその細い上体を強引に引き起こす。

「ひ、ああ……っ、ぬ、ぬける……う」

「抜けねえよ、動くなよっと」

正常位から、若者と対面で深く組み合うような体勢へ

カイトは必死に若者の首に 縋りつく 形になり、必然的に、その無防備な後ろの尻たぶが、シゲの目の前に突き出された。若者は不満を隠そうともせず、カイトの割れ目を左右に大きく押し開いて見せつける。

カイトは頬を赤く高揚させながら、その耐え難い羞恥に目を瞑った。

シゲは、日焼けして 垢塗れになった逞しい欲棒を取り出し、少年の窄まりに先端をあてがった。

サバイバルを支える男の粗野な質量が、赤く腫れた小さな孔を容赦なく押し広げていく。

ぐッ、……ぬ、ぬぐううううっっ、ぐぼんっ♡♡

「おほ～、やわらけええ！こんなにエロい身体によお、なっちまってなあっ！」

バシイイン！と、思い切り白く柔らかな尻を引っぱたくと、カイトの背がくんとしなり、恐怖から孔を強く締め付けた。

「あうう ♡♡んあぁあっ～～♡♡」

前穴を若者に、後ろの穴をシゲに。同時に貫かれたカイトの肉体は、逃げ場のない快樂と苦痛の 挟み撃ちに悲鳴を上げる。

「はあっ……あっ、やべ、もう出そうだぜ」

「ちょっとおっさん、早すぎるだろ！」

ずるっ、パンッ！ ずるうっっ！ パああん！

ゴツチュ、ゴツチュ、ゴツチュ、ゴツチュ—— ツ！！

「うあぁあ！ しゅごいい♡お、かしぐな、うっあぁ♡ん
アァ♡ アッアッア、！ あうう ～～～♡」

前後の質量が交互に、あるいは同時に突き入れられるたび、中でカイトの 膣壁と 腸壁が押し潰され互いの肉棒の輪郭が、薄い粘膜を隔ててゴツゴツと擦れ合う。

「あはははは、ごりごり当たって気持ちいいなあ！」

「これがいいんだろ？ あ？ 両方同時にイケるなんて、とんだ好きモノだよなあ？」

若者が前穴の最奥を抉れば、シゲの太い先端が後ろからそれを追い詰めるように突き上げる。

内臓が上下から サンドイッチにされるような 異様な感覚に、カイトの脳は破裂しそうだった。

ぐちゅううっ！ グブウツツ！ グチャ、グチャッ ♡♡ グジュ
ンツツツツツ ♡♡

「カイトくん、俺らの声、聞こえてないっすよお！ 涎垂ら
して目え、完全にイッちゃってるっス！！」

「おいおい、ひどえなあ！ 仕事前の大黒柱に対して、誠意
が足りねえんじゃねえか！」

パンッ！ パンッ！ パンッ！ パンッ！ パンッ ♡♡♡

「あゝぎッ！ はう♡ あぐうっ、あゝっ♡ ひぐう！ あゝ
うう、！ んアアあゝあゝ、〜〜♡」

二人の男は競い合うように律動を激化させていく。
カイトの意思など完全に置き去りに、ただ肉の玩具として
蹂躪するような、容赦のないピストン。

ごっ！ ごっ！ ごっ！ じゅぶつつ！ じゅぶつつつ！

ぐちゅんっ！ ドスッ！ ドスッ！ グチュッ！ グチュ
ンツツツツツ！！！！

「い！ あゝっ、あゝっ、あゝっあゝ！ あううつつ〜〜！ じ
ぬっ、じぬううっ、んアア〜〜♡♡ ひぐうう〜♡」

「死なねえよお！ ほら、もっと鳴け！ 前も後ろもぐちゃぐ
ちゃにしてやる！」

「おらあっ！ イき晒せ！ フンッ！ フンッ！ フンッ！」

ごぢゅんっ♡ゴッツ♡グヂュツツツツ！グチュツツ！グ
チュツツ！

バチュ、バチュ、バチュ、バチュ、バチュッ！

逃げ場のない内臓の奥が同時に叩かれ、カイトの脳内は完全
に白濁した。白目を剥き、熱い吐息と一緒に、蜜が際限
なく溢れ出る。

締め付けだけが異常なほどに高まり、二人の欲棒を壊れん
ばかりに締め上げた。

「まんこずっと痙攣してらっ！おオっ！おほっ、で
るうっ！」

ビュグツツ、ブビュッ！ビュグッ！ブビュッ！ビュグッ、
ビュううううう ～～～♡♡♡

「んぎィっ♡♡い、ぐぎ♡あううううううう ～♡
♡」

まずは若者の凶悪な射精がカイトの膣内に炸裂する。
どろどろと熱いザーメンが注がれ、内側から破裂しそうなほ
どの圧倒的な圧迫感に、カイトは激しく身を震わせる。
だが、地獄はまだ終わらない。

「おほっ、おおお、すごい締め付けだっ、ケツマンにも出すぞおっ！ 栄養満点のミルク出してやるからなあ♡♡♡」

前穴が精液でパンパンに満たされた状態のまま、今度は後ろの門が限界まで突き上げられる。

ズコッ！ズコッ！ズコッ！ズコッ！ゴジュンツツツツ♡♡♡♡

ぶびゅっ、ぶびゅうううううううううううううう — ツ♡♡♡

ぎゅうううううううううう ～～～♡♡♡

「ンあゝあゝあゝあゝあゝ ～～～～～♡♡♡♡ あぎィっ、あゝあぐううう ～～♡♡♡♡」

「はは、美味いか？ おじさんの特濃ザーメン、味わって残さず飲めよ」

満足げな呼気と共に、アナルからズル、と太い肉棒が引き抜かれる。

「あッ、は、うう、うううう……」

二つの孔からドロドロと溢れ出す白濁液を、カイトはもう拭う気力すらなく、ただ浅い呼吸を繰り返すことしかできない。

「あーあ、おっさんのせいで不完全燃焼っスよ。俺、まだ全然いけるのに」

前穴に自身の欲棒を挿したままの若者が、不満げに腰をびく、と動かした。

カイトの肉壁がそれに敏感に反応し、びくんと肢体を震わせる。

若者はニヤリと下卑た笑みを浮かべ、再びカイトの腰をガシッと掴み直した。

「カイトくん、おっさん行っちゃうから、ここからは俺がじいい〜っくり可愛がってあげるね？」

その様子を、シゲは腰布を巻き直しながら、心底名残惜しそうに見下ろしている。

「ちえっ、若えのは元気で羨ましいねえ。……おい、あんまりそいつを壊すんじゃねえぞ。俺が戻ってきたらまんこぐっちゃぐちゃにしてやるからなあ」

シゲは未練がましくカイトの胸の先端をギチ、と強く捻り、そのままモリを手にとって、洞窟の外へと出勤していった。

「……んあ♡ ああっ♡ やあああっ……、も、むり、い……っ♡♡」

中年の姿が見えなくなるや否や、若者は待ってましたとばかりに、再び激しく腰を振り始める。

ぐちゅ、ぐちゅ、ぐちゅ、ぐちゅっ、ぐちゅっ、ぐちゅっ！！

先ほどの精子と混ざり合い、さらにドロドロと下品になった水音が洞窟に響き渡る。

——終わらない。

この地獄は、救助が来るまで、あるいは自分が壊れるまで、絶対に終わらないのだ。

激しい律動に脳を揺らされながら、カイトの意識は、遠い記憶の彼方へと遡っていく。

始まりは、2週間前。

あの、眩しいほどに晴れ渡った青空の下で起きた、海難事故だった。

当時はまだ、誰もが理性を保ち、助けが来ると信じていた。
高瀬も優しく、みんなで励まし合っていた。

それが、あんな凄惨な形で壊れていくなんて、その時のカイトは知りもしなかったのだ。

——冷たい。

最初に感じたのは、それだった。

「おい！ 起きろ！」

腹の底に響くような怒鳴り声と一緒に、頬を何度も叩かれる。

「っ……う……」

重たい臉を無理やり持ち上げた瞬間、視界いっぱいに真っ黒な影が落ちた。

「生きてんのか、坊主」

知らない男だった。日に焼けた黒い肌。無精髭。潮と煙草が混じったような臭い。大きな手が、乱暴に顎を持ち上げる。

そこでようやく、自分が砂浜に倒れていたことに気が付いた。

青い海。激しい波音。ここは、何処だ。さっきまで、自分は船に乗っていて——。

「おい」

肩を乱暴に揺さぶられ、意識が現実に戻される。

「シゲさん、ちょっと離れろ、呼吸はあるな。脈も取れる」

その男臭い声に続いて、別の影が近づいてきた。

「あ、ちょっと見せて」

驚くほど、柔らかく知的な声だった。

その男は濡れた砂の上に膝をつくと、俺の顔をそっと覗き込んだ。

「聞こえる？ 指、何本に見える？」

「え……」

ぼやけた視界の中で、細長く綺麗な指が揺れる。

（……綺麗な手だな）

こんな極限状態だというのに、そんな場違いなことを思った。

「焦点が合っていないな」

男の指先が、そっとカイトの瞼に触れる。

「痛かったら言ってね」

眩しいスマホのライトが目にあたったり、カイトは思わず顔をしかめた。

「吐き気はある？」

「……ちょっと、します」

「うん、そっか」

男は小さく頷くと、後ろを振り返った。

「たぶん軽い脳震盪です。無理に立たせないで、最低一時間は安静にさせてください」

その一言で、張り詰めていた周囲の空気が少しだけ和らぐ。

（頼りになる人だな……）

そう思った瞬間、その男と真っ正面から目が合った。
……あれ。この人、どこかで

濡れた黒髪に、整った顔立ち。目元も眉も下がり気味の、
温和そうな男だった。年齢は二十代前半くらいだろうか。
絶対に知らない顔のはずなのに、カイトがじっと見つめて
いると、男は不思議そうに首を傾げた。

「どうかした？」

「あ……えっと、どこかで……」

そこまで言いかけて、はっとする。

船だ。沈没する前の、あの客船。

出航してすぐ、洗練された垢抜けた雰囲気印象的だった。

少し離れた席で、一人、静かに本を読んでいた人だ。

窓際で見かけた彼は、白いシャツに細いフレームの眼鏡をかけていて、泥臭い観光客や地元住民の中で一人だけ浮いていたから、よく覚えていたのだ。

(一方的に見かけてたなんて、流石に本人には言えないな……)

「あ……いえ、あ…ええと、なんでもないです。すみません」

「そっか。気分が悪くなったらすぐ言ってね」

男は一瞬だけ目を丸くしたあと、ふっと優しく微笑んだ。

「まだ横になっていて」

青年に肩を優しく押され、カイトは焚き火のそばに寝かされた。

濡れたシャツが肌に張り付いて気持ち悪い。
けれど、指先一つ動かす力も残っていなかった。

「……大丈夫。みんなの話は聞こえるでしょ？」

青年は安心させるように小さく笑うと、そのまま立ち上がり、他の生存者たちの輪へと加わっていった。
少し離れた場所から、カイトはその背中をぼんやりと見つめる。

焚き火を囲む、大人たち。全員、見知らぬ男。
それだけで、カイトの喉の奥がキュッと苦しくなった。

「……生き残ったのは、今確認できているので五人だ」

低く硬い声が、島の静けさに響く。

「えっ……」

まだあどけなさの残るカイトの声が漏れ、男たちの視線が一斉にこちらへ向いた。
カイトは慌てて己の口を両手で塞ぐ。

(家族は……みんな、どうなったんだろう……)

今、この場で家族の安否を尋ねるのは憚られ、胸が引き裂かれそうになる。

「他に人影はなし。流された可能性もあるが……日が落ちる前に拠点を決める」

間を置いて、先ほどの低い声の男が淡々と口を開く。

誰も口を挟めない。

濡れたシャツが男の筋肉質な肉体に張り付き、でこぼこした強固なラインが浮かび上がっている。

サイドと後ろ髪が短く刈り上げられた、清潔感のあるツーブロック。固そうなツンツン髪が印象的だった。

年齢は三十代後半くらいだろうか。

座っている状態でも分かるほど長身で肩幅があり、妙な圧迫感がある。

体型もそうだが、彼の纏う厳格な雰囲気には圧倒されるのだ。

現に、この場にいる全員が自然と彼の言葉を待っている。

今のところ、この中でリーダーシップを持っているのは彼のようにだった。

「一旦、名前だけ確認する」

男が鋭い視線で周囲を見渡した。

「俺は高瀬。元海保だ」

「カイホ……？」

思わずカイトが呟くと、また注目を浴びてしまい、「すみません」と目を伏せる。

すかさず、あの優しそうな好青年がフォローを入れた。

「海上保安官のことだよ。海難救助とかをする人。『海猿』っていうドラマ、見たことある？」

「あっ……海猿」

「へえ、海保かあ。南の海か？ 本土か？」

「……本土だ。太平洋側が長い。そんなことより、次はあんただ」

展開していく会話に、高瀬は眉間に深い皺を刻み、隣に座る日焼けした中年に促した。

「ちっ、お堅いことで。オレはシゲだ。職業は見りゃ分かるだろ」

焚き火に薪を放り込みながら、シゲは吐き捨てた。

父親より年上に見える。

五十代と言われても違和感はない。

筋肉質な太い前腕、日に焼けて固くなった皮膚、節くれだった手。

海と煙草と酒に、長年削られて生きてきたような男だった。高瀬とシゲは二人とも日焼けした海の男という風貌だが、中身はまるで正反対だった。

シゲは野性的だが、高瀬は規律正しく研ぎ澄まされている。どちらにしても、この極限環境において最も頼りになりそうな二人だった。

そして先ほどカイトを診てくれた青年が、穏やかに笑う。

「一ノ瀬です。医大生。……まあ、少しは役に立てるかな」

「さ、佐伯です……会社員、です……よろしくお願いします」

一重の三白眼をした、いかにも幸の薄そうな顔立ちの男がペコペコと頭を下げる。

年齢は三十代前半くらいだろうか。砂まみれの革靴を片方だけ履き、

脱いだスーツジャケットを頼りなさげに腕にかけている。

背は高いのに酷い猫背のせいで、妙に小さく見えた。

濡れた白シャツの隙間から浮き出た肋骨が、なんだか生々しい。

佐伯を観察していると、不意に四人の男たちの視線が、一斉にこちらを向いた。

「……坊主。お前は？」

シゲの太い声に、カイトは肩を跳ね上げる。

「あ…え、ええと……白石、カイトです。大学1年生です」
「えっ！？ 大学生！？ 嘘だろ、中学生かと思った……！」

佐伯がひっくり返ったような声を上げた。

カイトの身体は、生まれつき女性ホルモンが優位な特殊体質だった。

そのため骨格は女性のように細く、髭も生えず、声も高いまま。

実年齢より幼く見えるのはいつものことだったが、ここまで驚かれるとは思わなかった。

男たちの視線が、カイトの透けるような白い肌や、華奢な鎖骨、濡れてぴったりと張り付いた小さな肩に一斉に集まる。値踏みするような、あるいは「男のくせに」と奇妙なものを見るような視線に、

カイトは（あ、言わなきゃよかったな……）

と激しく後悔して、思わず身を縮めて目を伏せた。

「へえ、大一生かい。見えねえなあ。いいなあ、若くてピチピチしててよお」

シゲがニタニタと下卑た笑みを浮かべて話に入ってくる。

すると、コホンと冷たい咳払いが響いた。

全員の意識がそちらに向いた。

高瀬だ。シゲを一瞥し、こちらをギロリと睨みつけながら、端的に告げる。

「日が落ちるまであと二時間、時間がない。拠点になりそうな場所を探そう」

「あ、高瀬さん。俺とカイトくんはここで待機でいいですか？」

一ノ瀬が手を挙げ、高瀬に提案した。高瀬は少し思案し、そっけなく答える。

「ああ、分かった。3人いれば探すには十分だろう」

「じゃあ出発する前に、擦り傷や切り傷がある人、先に見せてください。小さい傷でもこういう場所で感染したら厄介だから」

「い、一ノ瀬さん、俺、歩けます……っ」

カイトは足手まといになりたくなくて、慌てて起き上がろうとした。

しかし、一ノ瀬の綺麗な手がそっとカイトの肩を制した。

「ダメ。こういう場所での無理は命取りだよ。それに、高瀬さんたちの歩くペースに合わせられる？」

「……っ」

言葉に詰まる。確かに、一ノ瀬の言う通りだ。

自分がついていっても足を引っ張るだけなのは目に見えている。しかし、こんな時に一人だけ何もしないのは申し訳なかった。

「大丈夫、俺も残るからさ」

一ノ瀬の優しい笑顔に、カイトはホッと胸を撫でおろした。

「はい……！ ……ありがとうございます」

二手に分かれることとなり、高瀬、シゲ、佐伯の3人は早速、拠点を求めて浜辺を出発した。

その立ち去る際——カイトは不快な寒気に襲われた。

会社員の佐伯が、歩きながら何度も、ちらちらとこちらを振り返っていたのだ。

その視線はカイトの顔ではなく、濡れたシャツが肉薄に張り付く、腰のラインに、執拗に注がれていた。

カイトはゾクツとするような、かすかな居心地の悪さを覚え、無意識に腕で自分の身体を隠したのだった。

パチパチと焚き火が爆ぜる音と、遠くから響く不穏な波音だけが洞窟を満たしていく。

高瀬たちが偵察に出てしまい、急に静まり返った暗い空間で、カイトは焚き火の脇に横たわったまま、寒さに身を震わせていた。

濡れたシャツが容赦なく肌に張り付き、じわじわと体温を奪っていく。

そんなカイトの隣に、一ノ瀬がそっと膝をついた。

彼の手には、砂を払っただけの乾いた流木が握られている。

「まだ頭がクラクラするよね。吐き気もあるみたいだし、無理に首を上げちゃダメだよ。……ほら、こっちを向いて、横向きになろうか」

一ノ瀬は手慣れた手つきで、カイトの華奢な身体をそっと横向きに寝かせ直した。

万が一、急に嘔吐しても喉を詰まらせないための的確な処置だったが、そのせいでカイトは、上側の膝を軽く折り曲げお尻のラインを無防備に突き出すような姿勢にされてしまう。

一ノ瀬は流木を火にくべると、カイトの顔のすぐ近くに自らの顔を近づけ、覗き込むようにして視線を合わせた。

「一ノ瀬さんって……東京の人ですか？」

至近距離にある端正な顔と、耐えがたい沈黙に耐えかねて、カイトは寝たまま震える声で尋ねた。

一ノ瀬はふっと柔らかな笑みを浮かべる。

「ん、そうだけど。どうして？」

「なんていうか……その、洗練された感じがするというか」

カイトが視線を泳がせながら言うと、一ノ瀬は一瞬だけ目を丸くし、それから可笑しそうに、けれど上品に肩を揺らした。

「えっ、そうかな？ 普通だよ。カイトくんはこの辺の子？」

「いえ、関東圏に住んでいて……。今回は、家族と一緒に旅行に……」

口にした瞬間、胸の奥がズキリと鋭く痛んだ。
一ノ瀬の穏やかな眼差しが、横たわるカイトの小さな心の
綻びを見逃さずに、ふっと和らぐ。

「……それじゃあ、心配だね」

聲音に混じった、あまりにも本物めいた慈愛。
カイトは喉の奥がキュッと詰まるような感覚を覚えた。
このまま放っておかれたら、限界の涙が堰を切って溢れてしま
いそうで、寝返りも打てないまま、慌てて言葉を捲し立
てる。

「……はい。あ、で、でも……っ、他の人も口に出さない
だけで、きっとみんな同じだし……俺だけが弱音を吐い
ちゃダメですよ。あの、すみません、こんな格好悪い話を
してしまって」

この話をするつもりなんてなかった。ただでさえ足手まと
いなのに、

口走ってしまったことで一ノ瀬に余計な心配をかけ、気を遣わせてしまったことがたまらなく気まずい。

だが、そんなカイトの視界に、一ノ瀬の白く綺麗な手が映り込む。

一ノ瀬はそっとカイトの細い肩に手を置くと、包み込むように優しく、一定の律動で叩いた。

寝たままその温もりを受け止めると、ストレートに心に染み込んでくる。

カイトは肩を小さく震わせながら、すぎるように、潤んだ瞳で一ノ瀬を見上げた。

「一ノ瀬さんは、ちゃんと医大生としての役割もあって、みんなの役に立ってて……」

『カイト、酔い止め飲んだ？』

『大学1年生にもなって、迷子になるなよ』

『ほら、写真撮るからこっち見てー』

眩しい笑い声。爽やかな潮風。穏やかに揺れる船内。
紙コップに入った、少しぬるいオレンジジュースの味。
その、すぐ直後だった。

耳をつんざくような、おぞましい警報音。

重力を失ったように激しく傾いていく床。
誰かの「上へ上がれ！」という必死の怒号。
散乱した救命胴衣を必死に掴み、命からがら飛び出した
デッキで待っていたのは
漆黒の荒海と、波にもみくちゃにされる救命ボートだった。
濁流のような冷たい波が船体を叩きつけ、カイトの身体を
容赦なく引き剥がす。

必死に手を伸ばす父親の歪んだ顔。
引き裂かれるような、母と姉の悲鳴——。
それが、暗い暗い海に吞まれる前の、最後の記憶だった。

（何で、ここにきて思い出してしまったんだろう……）

考えないように、心を麻痺させていたのに、一度思い出してしまっただけもう駄目だった。

喉の奥が熱く詰まる。

まずい、と思った時には、もう遅かった。

鼻の奥がツンと痛み、大粒の涙が、白い頬を伝ってボロボロと溢れて止まらなくなる。寝ているせいで、涙は耳の後ろへと冷たく流れていった。

カイトは片腕で顔を覆い、しゃくりあげる嗚咽を必死に堪えながら、震える声で謝罪を述べた。

「す、……すみません……っ、泣くつもり、じゃ……」

「大丈夫。ここには俺しかいないから。……我慢しないで、泣いていいよ」

一ノ瀬は困ったように、けれどどこまでも慈しむような優しい声音で言うと、濡れていない方の上着のポケットの奥に手を突っ込んだ。

取り出したのは、潮水で少し湿ってはいるものの、内側に折りたたまれて奇跡的に乾いた部分が残っている、真っ白で清潔なハンカチだった。

一ノ瀬は顔を覆うカイトの細く冷え切った手首を、優しく、けれど拒絶を許さない確かな力で握って押し下げた。

そして、自らの顔をさらにカイトの顔へと近づけ、その乾いた布地で、涙でぐちゃぐちゃに濡れたカイトの頬を丁寧に拭いていく。

「カイトくんは肌が白いから、泣くとすぐ赤くなっちゃうね」

そう言って、一ノ瀬は横たわるカイトの頭をそっと引き寄せ、安心させるようにその細い背中を優しく撫でた。

カイトは一ノ瀬の膝元に顔を埋める形になり、彼の洗練された白いシャツの袖口に涙を滲ませながら、ただひたすらに嗚咽を漏らし続けた。

——カイトは、まだ何も知らない。

最初の診察の際、濡れたシャツの上から触れた骨格の異常な細さ。

そして、回復体位を取らせるために触れた腰のくびれや、衣服の隙間から見えた、

通常の男にはあるはずのない【特殊な身体の割れ目】の形に、この優秀な医大生が、すでに気づいているということ

を。
背中を優しく撫でる一ノ瀬の視線が、カイトの頭越しに、誰もいない暗い海の向こうへと向けられる。

「……男の生存者しかいない中で、そんな顔で泣かれたら、みんな困っちゃうな」

ざあざあ、と激しく岩肌を抉る波の音と、カイト自身の泣き声にかき消され、

その低く冷ややかな呟きが少年の耳に届くことはなかった。
一ノ瀬の端正な唇が、ほんの少しだけ、愉しげに歪んだ弧を描く。

カイトがようやく顔を上げたときには、彼はもう、いつもの頼れる優しい「一ノ瀬さん」の笑顔に戻っていた。

「……ありがとうございます」

カイトはホッと小さく息を吐き、一ノ瀬の暖かい手のひらの下で、すっかり体の力を抜いた。

これからどうなるのか分からない不透明な状況で、必要以上に踏み込まない、けれど確かに自分を男たちの脅威から守るように寄り添ってくれる一ノ瀬のこの距離感が、今のカイトにはたまらなくありがたく、愛おしかった。

十数分後、搜索に出ていた探索隊が洞窟へ戻ってきた。カイトは一ノ瀬に促され、ゆっくりと上半身を起こそうとしたが、戻ってきた彼らの姿を見て、一ノ瀬と共に息を呑んだ。

高瀬とシゲの間に、見慣れない男が一人、両肩を借りるようにして引きずられていたからだ。

「うわ、マジでえ助かった……！死ぬかと思った、ガチで……っ」

その男は浜辺にへたり込むなり、濡れた派手な柄シャツの胸元を大きくはだけさせて、荒い息を吐き出した。

金髪の混じったツーブロックに、耳元で品なく光るピアス。この過酷なサバイバルにはおよそ似つかわしくない、軽薄そうな二十歳前後の若者だった。

「……別側の入り江の岩場に引っかかっていた」

高瀬が忌々しそうに、けれど安堵を隠さない低い声で説明する。

「怪我は擦り傷程度だ。動けるな、ショウ」

「動けるっす、動けるっす。高瀬さんマジ命の恩人。……あ、お疲れさまでーす」

ショウと呼ばれた若者は、自分たちが置かれた状況の深刻さを分かっているのかいないのか、焚き火のそばにいる一ノ瀬と、その横で小さくなっているカイトを見て、ニカッと緊張感のない笑みを浮かべた。

その瞬間、ショウの無遠慮な視線が、一ノ瀬のすぐ傍らで横たわっていたカイトの、華奢で白い身体にピタリと留まる。

シャツが肌に張り付いて浮き出た細い腰のラインを、ショウは舐めるように見つめた。

「うわ、可愛い子ちゃんいるじゃん。学生？ よろしくねー」

人懐っこい、けれどあからさまに性的な対象として値踏みするような、無礼な視線。

カイトがその圧力に気圧され、一ノ瀬の背後に助けを求めるように身を隠すと、カイトの肩に触れていた一ノ瀬の指先が、ピクリと硬くなった。

だが、一ノ瀬はすぐにいつもの柔らかな笑みを面に貼り付け、カイトを物理的に隠すように一歩前に出る。

「一ノ瀬です。彼はカイトくん。……まだ頭を打った影響で体調が良くないから、あまり騒がずに静かにしてあげてね」
「あ、スンマセン」

ショウは頭を掻きながらも、一ノ瀬の背後から覗くカイトの怯えた瞳を、面白そうに見つめ返していた。

人数はこれで6人。全員で、完全に日が落ちる前に新たな拠点へと移動することになった。

岩場を越えた先に、それはあった。

切り立った崖の中腹。波に長い年月を削られてできたのだろう、黒ずんだ岩肌にぽっかりと不気味に口を開けた、浅い洞窟だった。

入口は大人が三人並んでも余裕があるほど広く、内部は思っていたより奥行きがある。

天井も高く、背の高い高瀬やショウが立っても頭をぶつけることはなさそうだった。

足元には乾いた砂と小石が混じり、ところどころ白く砕けた珊瑚の欠片が散らばっている。

洞窟の奥からは、ひやりとした、どこか墓穴を思わせる冷たい空気が流れてきた。

外では絶え間なく波が岩にぶつかり、ざぶん、ざぶん、と低い音を響かせているのに、ここまで入ると不思議なほど風は弱い。

重苦しい海の匂いに混じって、湿った生臭い岩の匂いが鼻を掠めた。

入口から見える空は、すでに血のような橙色に染まり始めている。

「……今夜を越すだけなら、悪くないだろう」

そう呟いた高瀬の声が、暗い岩肌に小さく反響した。

新たな拠点の中に再び焚火を起こし、男たち6人で輪になってそれを囲む。

「水は最優先だな」

高瀬が空のペットボトルを掲げながら、ため息交じりに言った。

この島に流されたとき、運よく救命ボートも一緒に流れ着いたらしく、最低限の非常用水は確保できていた。

しかし入っていたのは僅か2本で、先ほど1本分を消化し、残りはもう1本しかない。明日中に水源を見つけられなければ、全員が乾き果てて生き伸びることは難しいだろう。

「明日に備えて今日のところは寝よう。そこで、火の当番を決める。……人数が増えた。二時間交代で、今日のところは4人だ。最初は俺がやる。次に、シゲさん」

「まあ、そうなるわな。良いぜ」

「その次は……おい、ショウ。お前だ。動けるな」

高瀬に鋭く睨まれて、ショウは「えー、マジっすか」とだるそうに金髪を掻いた。

「まあ恩人の命令だし、やりますけどお〜。じゃあ俺の次は佐伯さんね」

「えっ、ボクですか?!」

佐伯は自分を指さしながら、あからさまに不服そうな、情けない声を上げた。

大人の男たちがこうして過酷な役割を決めていく中、自分だけが何もできないことが心苦しくなり、カイトは申し訳なさから「あの……俺も、やります」と小さく手を挙げた。

「それはダメ」

すかさず、一ノ瀬の低く優しい声がそれを遮り、挙げられたカイトの手をそっと押し下げた。

「無理して症状が悪化したら、この環境じゃ取り返しのつかないことになる」

高瀬も「一ノ瀬の言う通りだ。お前は寝ていろ」と短く告げた。

すると、一ノ瀬の手がカイトの背中を、あやすように軽く叩く。

「今日はありがたく大人に甘えて、休ませてもらおうね」

「あ……ありがとうございます。明日から、ちゃんと頑張ります」

「おー、若者は寝ろ寝ろ」

シゲが下卑た顔で笑う横で、ショウがカイトの顔をじっと見つめながら

「カイトくん、おやすみー」と、妙に甘ったるい軽い声音でひらひらと手を振った。

各々、岩肌に寝床を取るようになった。

高瀬は入口側の火の近く、シゲは高瀬とさほど距離を開けず岩壁沿いに陣取る。

そこから焚火を跨いだ場所に、気まずそうに会社員の佐伯が落ち着き、その隣にカイト。そして、カイトを守るようにして一ノ瀬がぴったりと並んだ。

ショウは「俺、寒い嫌だから奥がいいわ」と、一ノ瀬のさらに奥の暗闇へと転がっていった。

「おやすみ」

一ノ瀬の静かな声が暗闇に溶ける。

「おやすみなさい、一ノ瀬さん」

湿った岩の匂いと、時折爆ぜる薪の音。

カイトは目を瞑りながら、一ノ瀬の確かな温もりに縋るようにして、泥のような意識へと沈んでいった。

——自分の背後。

一ノ瀬を挟んださらに暗闇の奥から、新しく来たあの金髪
の若者 ショウの獰猛な視線が、じっと自分に向けられてい
るような奇妙な寒気を覚えながらも
カイトは眠りへと落ちていった。